

一人旅の楽しみ

川本三郎

(評論家)

もともと一人旅が好きだつたが、八年前に家内を亡くし、一人暮しになつてから、以前に増して一人で旅することが多くなつた。

月に一度か二度、旅に出る。といつてもせいぜい一泊か二泊の小旅行。長旅はまづしない。せつかく旅をしても疲れてしまつては意味がない。一人旅は、普段の散歩の延長と考えている。

だからたいていは国内の鉄道の旅。とくにローカル線に乗るのが好きで、国内のJRはほとんど乗っている。一人旅の良さはいろいろあ

るが、何よりもまず気まま自分勝手な旅が出来ることだろう。物書きという仕事柄、ふだんから一人でいることが

表紙の言葉

「墨牡丹」

今回、墨牡丹を描いたのは基底材に「サマルカンド紙」を使用したことになります。シルクロードの交易で栄えた国ウズベキスタンのサマルカンドで漉かれた、桑の纖維を原料としている紙です。墨を入れると独特の浸潤性により思ひがけない表情となりします。中国で発明された紙漉きは東西に別れ土着しましたが、中国の花である牡丹をモチーフに日本画として描くことに何とも言えぬ趣がありました。

旅先も旅程も自分で決められる。小旅行だから、思い立った時にすぐに出られる。旅行に出ると大仰に考える。あくまでも散歩の延長。行く先是ローカル線沿いの小さな町が多い。団体旅行だと、どうしても行先が観光地になってしまふ。立派な旅館、豪華な夕食は、一人旅には向かない。だから一人旅の好きな人間には欠かせないのは、時刻表と全国ビジネスホテル・ガイドブック。思いもかけない小さな町にビジネスホテルがあるのを知つて、そこに出かけたこともある。小さいとはいっていい、ホテルがある町には必ず木造の駅舎を降りる。昔ながらの商店街がある。個人商店が並んでいる。神社や寺がある。町並みが尽きると水田が広がっている。田んぼ道を歩いて、また町に戻り、駅前の大衆食堂でビールを飲む。こんな楽しいことはない。最近は、ちょっとした町にはビジネスホテルがある。そこに泊る。一人旅にはそれでいい。夜は、町に出て、いい居酒屋を見つけ、孤酒を楽しむ。立派な旅館、豪華な夕食は、一人旅には向かない。だから一人旅の好きな人間には欠かせないのは、時刻表と全国ビジネスホテル・ガイドブック。思いもかけない小さな町にビジネスホテルがあるのを知つて、そこに出かけたこともある。小さいとはいっていい、ホテルがある町には必ず

松村公嗣

多い。原稿を書く、本を読む、映画を見る、音楽を聴く。一人で出来ることばかり。自然と旅も一人でするようになつた。

歩いて、また町に戻り、駅前の大衆食堂でビールを飲む。こんな楽しいことはない。最近は、ちょっとした町にはビジネスホテルがある。そこに泊る。一人旅にはそれでいい。夜は、町に出て、いい居酒屋を見つけ、孤酒を楽しむ。立派な旅館、豪華な夕食は、一人旅には向かない。だから一人旅の好きな人間には欠かせないのは、時刻表と全国ビジネスホテル・ガイドブック。思いもかけない小さな町にビジネスホテルがあるのを知つて、そこに出かけたこともある。小さいとはいっていい、ホテルがある町には必ず

日。従つて列車は空いてい
る。ローカル線で座れないこ
とはまずない。

ゆっくり座つて本を読む。

疲れたら車窓の風景を見る。

鉄道が書斎になる。時には、
本を読みたいために一人で鉄
道に乗ることもある。「車内
読書」と呼んでいる。

車の運転が出来ないので旅
先ではともかく歩く。歩いて
町の風景を見る。大自然には
あまり興味がない。人の暮し
を見るのが好きなので、はじ
めて降りた町をただ歩く。い
つか日常のことを忘れて、風
景のなかに溶け込んでいる。
忘我の良さだろうか。

四国のお遍路の旅は、ひたす
ら歩く。歩くことが心の安定
をもたらすという。それを実感したのは、家内
を亡くしたあとだった。五十

七歳の若きで癌で逝った家内
のことを思うと、家に一人で
いて、居たまくなつた。そんな時、思い立つて中
央本線に乗つた。

高尾から先きの駅を、日を
替えてひとつひとつ降りて、
町を歩いた。高尾から甲府ま
で半年ぐらい、そうした。気
がついたら、少し元気になつ
ていた。知らないうちに自分
なりの遍路をしていたのかも
しれない。

家族は大事だし、人と人の
つながりも生きてゆくには欠
かせない。それはよく分かつ
ているのだが、一人でいるの
が好きな人間もいる。一人で
いるのが大事なこともある。

ただ、それがなかなか分つ
てもらえない。一人旅をして
いると、旅先で必ず町の人た
ちに、「寂しいでしょ」と

氣の毒がられる。「いや、幸
せなんですよ」と言つても強
がりと思われる。「男はつら
いよ」の「寅さん」みたいに
自分で勝手で気ままな旅をして
いるのだから仕方がない。

七十歳を超えたいま、一人
旅で困ることがある。列車の
なかで眠つてしまい、気がつ
いたら降りる駅をどうに過ぎ
ていること。

最近は、仕方なく、目覚し
時計を持って列車に乗るよう
になつた。

朱鎔基の師、 宮崎勇さん

高橋政陽

(元テレビ朝日台北支局長)

「援助は感謝されるためにす
るものですか。はしたなくな
いですか。そういう気持ち